

(様式 1)

令和 3 年度 学力向上を図るための全体計画

学校名	墨田区立豎川中学校
校長名	織部 明広

1 本校の学力に関する状況

(1) 墨田区学習状況調査結果から

成 果	課 題
<p>・ 第 1 学年は、全国平均正答率より<u>国語総合</u>が 7 P、<u>社会総合</u> 5.2 P、<u>数学総合</u> 4.3 P、<u>理科総合</u> 1.4 P、<u>英語総合</u> 5.3 P 全教科上回っている。</p> <p>・ 第 2 学年は、全国平均正答率より<u>国語総合</u> 8.5 P、<u>社会総合</u> 5.7 P、<u>数学総合</u> 6 P、<u>英語総合</u> 10.4 P 上回っている。<u>理科総合</u>の全国平均正答率を微量に下回っているが、経年変化では、昨年度より 2.5 P 全国平均正答率差をつめている。</p> <p>・ 第 3 学年は、全国平均正答率より<u>数学総合</u> 3.6 P、<u>英語総合</u> 5.4 P 上回っている。</p>	<p>・ 第 1 学年は、全教科全観点平均正答率を上回っているが、<u>理科</u>では、基礎問題については、ほぼ全国平均正答率と同値であり、観点別正答率では、<u>3 観点</u>全て区平均正答率より 5 P～2.4 P 下回っている。<u>数学</u>も同様に全国平均正答率を上回っているが、区平均正答率に比べ領域の数と計算、図形が下回っている。</p> <p>・ 第 2 学年は、<u>理科</u>の観点別正答率では、<u>自然事象への関心・意欲・態度</u>以外の 3 観点で全国平均正答率より微量であるが下回っている。</p> <p>・ 第 3 学年は、<u>国語</u>の観点別正答率では、書く能力の観点が全国平均正答率より 5.4 P、言語についても知識・理解・技能観点が 1.5 P 下回っている。<u>社会</u>では、観点別正答率では、<u>社会的事象についての知識・理解</u> 3.8 P、下回っている。<u>理科</u>の観点別正答率では、<u>観察・実験の技能</u>の観点が全国平均正答率より 10.3 P、<u>自然事象への関心・意欲・態度</u>の観点が 7.4 P 下回っている。</p>

(2) 意識調査結果から

成 果	課 題
<p>・ 全学年「成功体験と自信」<u>設問</u> <u>勉強やスポーツ、習い事、趣味などで、今頑張っていることがありますか。</u>では第 1 学年の肯定率が 96.4%あり 3.1P、第 2 学年は 94%あり 2.1P、第 3 学年は、95.5%あり 4.9P、それぞれ全国平均を上回っている。このことは、各教科の平均正答率の向上とリンクしている。</p> <p>・ 全学年「学習習慣・意欲」<u>設問</u> <u>学校の授業の予習や復習をしていますか。</u>では第 1 学年の肯定率 68.5%あり 11.7P、第 2 学年は、肯定率 57.3%あり 10.7P、第 3 学年は、肯定率 55.9%</p>	<p>・ 「学習習慣・意欲」<u>設問</u> <u>学校の授業以外に、平日 1 日どれぐらいの時間、勉強をしますか。</u>では第 1 学年が、【まったくしない】という生徒が 6.3%、第 2 学年は 7.3%、第 3 学年 6.3% いる。以上の生徒に毎日 30 分以上の学習習慣を身に付けさせ学力向上を図る。</p> <p>・ 「学習習慣・意欲」<u>設問</u> <u>土日や祝日など、学校が休みの日は、1 日どれぐらいの時間、勉強しますか。</u>【まったくしない】という生徒が第 1 学年 15.3%、第 2 学年 9.5%、第 3 学年 16.2% いる。以上の生徒に土日や祝日に 1 時間以上の</p>

あり 6.2P それぞれ全国平均を上回っている。 特に、 第1・2学年 での各教科での校内平均正答率の向上に繋がっている。	学習習慣を身に付けさせ学力向上を図る。
---	---------------------

(3) 墨田区学習状況調査や意識調査以外から明らかになっている学習に関する状況

成 果	課 題
<ul style="list-style-type: none"> ・<u>英語</u>では、少人数制習熟度別クラスによる上位層と中間層、中間層と下位層との学び合い活動により英語においては、全学年で全国平均正答率を5P上回っている。 ・<u>数学</u>でも、少人数制習熟度別クラスによる学び合い活動により、全学年で全国平均正答率より3.4P～6P上回っている。 ・<u>国語</u>においては、タブレット端末のロイロノート等の活用による話し合い活動により、第2・3学年での「話す・聞く能力」の観点別正答率が全国平均より上回り、第2学年では経年変化で3.3P上昇している。 ・<u>理科</u>の第2学年では、全国平均正答率を下回っているが、昨年度との経年変化では、2.5P上昇している。 	<ul style="list-style-type: none"> ・<u>理科総合</u>では、第1学年は、全国平均正答率を上回っているが、1.4P上回るに止まっている。また、第2・3年での【科学的な思考・表現】の観点、【観察・実験の技能】の観点別正答率が全国平均正答率を下回っている。この結果より、第3学年でのAB層の減少しDE層の増加にも繋がっている。今後下位層への個別指導が必要である。 ・全学年の不登校生徒へのタブレット端末を活用したドリル学習等による基礎学力の定着の必要である。 ・全学年対象に、学習習慣の定着に向けて家庭学習ノートの提出率を上げていく必要がある。

2 本年度の学力向上に関する主な取組

(1) 各種コンテスト並びに検定受験への学校全体での組織的取組。

年間を通して、漢字・数学・英文・新聞・地理コンテストの5つのコンテストを行う。教科を越えて、学校として事前学習を行う。また、漢字・数学・英語検定を推奨し3検定3級以上のトリプル3合格を目指す取組を行う。優秀者を表彰し昨年度からの成長を伝えていくことで学習意欲の向上に努めていく。コンテストの期間だけでなく、日頃から学力が定着するように各教科の授業の中で定期的に振り返り学習を行っていく。

(2) 教員の授業力向上に向けての取組

管理職による定期的な授業観察による指導助言を実施する。また、年2回の教員同士が授業を見合う互見週間をもうけ2教科以上の授業を参観し、良かった点、工夫が必要な点について参観レポートをもとに意見交流の場を設け授業改善に役立てていく。さらに、区外の指導教諭の模範授業の報告会や職員会議後のミニ研修で指導の工夫・評価・評定について管理職より資料提示し、研修を深め教員の授業力と研修意欲を高めていく。

(3) 区研究協力校としての「主体的対話的深い学びの評価」生徒の意欲を向上させる評価の仕方の研修

令和3年度墨田区教育委員会研究協力校として、令和3年度新学習指導要領全面実施、生徒の意欲を向上させる評価に向けた各教科の新しい観点の評価材料と評価方法を検証していく。そのために、授業を行う際に、どのように生徒の学力向上につなげ、どのように評価すれば生徒の意欲向上につなげられるかの工夫ある授業を実践し、研究の成果と課題を明らかにしていく。

3 「令和4年度 墨田区学習状況調査」における目標

(1) 目標

- ・ **第1学年**は、全国平均観点別正答率が全教科全観点平均正答率を上回っているが、理科の【知識・技能】、【思考・判断・表現】、【主体的に学習に取り組む態度】の観点別正答率を区平均正答率までに引き上げていく。そのために、生命・地球の領域で植物のつくりと働き(蒸散についての理解)、「大地のつくりと変化」(断層についての理解)、物質・エネルギーの領域での「てこのはたらき」(てこにおける物の重さと距離との関係)の知識・理解を深めるため実験などの体感できる活動と、授業の中で思考が必要な課題を多く設定する取り組みを行う。そして、DE層を30%以下にしてAB層を50%に引き上げていく。
また、数学も同様に領域において、(数と計算)、(図形)について平均正答率を区平均正答率より上回るために、図形の領域での「平面図形」(円周の長さを求める式)についての知識・理解を定着させるため公式復習の徹底し小テストで確認をする取り組みを定期的に行う。そして、DE層を25%以下にしてAB層を65%に引き上げる。
- ・ **第2学年**は、理科については、全観点全国平均正答率と同値である。特に、【観察・実験の技能】、【自然事象についての知識・理解】の観点の平均正答率を目標値まで引き上げる。そのために、生命の領域での「動物の分類」(軟体動物)、地球の領域での火山(火山岩のつくり)について、小テストやドリルを繰り返し行い、定着を図る取り組みを行う。そして、DE層を45%まで引き下げてAB層を40%まで引き上げる。
- ・ **第3学年**は、国語については、【書く能力】、【言語についての知識・理解・技能】の平均正答率を12月までに全国平均正答率に届くまで引き上げていく。そのために、書くことの領域での「作文」(3段落構成で、自分の考えを明確書く)、言語についての知識・理解・技能の観点における「文法・語句に関する知識」(歴史的仮名遣いを現代仮名遣いに直す)を身に付けさせるために考えや主張を200字作文にまとめる練習を取り入れるとともに、文法・語句について、復習を反復して行う等の取り組みを行う。そして、DE層を31%に止め、AB層を51%に引き上げる。社会については、12月までに【社会的事象についての知識・理解】の観点別平均正答率を全国平均値まで引き上げる。そのために、世界とくらべた日本の地域的特色の領域「環太平洋造山帯の特色」、日本の諸地域「北海道、九州地方の酪農、工業地帯についての資料」、ヨーロッパ人との出会いと全国統一の領域(地租改正についての)の知識・理解の定着にむけて、関連語句の小テストを行い、語句の知識の定着を図る取り組みを行う。そして、DE層30%に止め、AB層50%に引き上げていく。理科については、【観察・実験の技能】の観点別正答率を5P、【自然事象への関心・意欲・態度】の観点別正答率3P引き上げる。そのために、「物質の成り立ち」、「科学変化と物質の質量」、「電流と磁界」において、表やグラフの見方についての理解を進めるとともに、基本用語の小テストを行い、基礎知識定着の取り組みを行う。そして、DE層を45%に止めAB層を40%まで引き上げる。